

一橋大学博士学位申請論文審査報告書

平成 25 年 7 月 10 日

申請者 田中嘉彦

論文題目 英国の貴族院改革 ― ウェストミンスター・モデルと第二院 ―

審査員 只野雅人、渡辺康行、辻琢也

イギリス型の議院内閣制はウェストミンスター・モデルと呼ばれ、日本国憲法の制定時にも、さらには 1990 年代以降の政治改革に際しても、重要な参照モデルとなってきた。田中嘉彦氏は、本論文において、非公選の第二院（貴族院）というウェストミンスター・モデルの独特の構成要素に着目し、とりわけ近時の貴族院改革を主たる素材として、単一国家における第二院の存在意義を検討している。田中氏は、憲法学、政治学双方からのアプローチを意識し、歴史という縦軸からの検討、比較という横軸からの検討という複合的視座を設定する。そして、下院多数派と内閣との融合を特徴とするウェストミンスター・モデルにおいて、貴族院が、民主的正統性の欠如という弱点を抱える一方、非公選であるがゆえに、修正機能、抑制と均衡といった機能を果たしてきたことを、丹念に解き明かしている。

本論文について何より評価されるべきは、検討対象をめぐる、分析の緻密さと確かさである。貴族院制度は、諸規範や慣行の集積として歴史的に形成されてきたものであるだけに把握が容易ではなく、また近時の改革論議も錯綜しているが、田中氏は、関連する文献・資料を網羅的に検討し、貴族院の実像や改革論議について、細部に至るまで緻密かつ正確に、バランスよく描き出している。国会図書館職員として、長年、立法調査に携わってきた田中氏ならではの手法であり、巻末や脚注にあげられた参考文献・資料からもうかがえるように、高い信頼のおける研究となっている。現代イギリス議会制をめぐる第一級の研究資料と評することができよう。

本論文はまた、議会両院の選挙制度、代表基盤、両院関係、さらには解散制度など、重要な論点をめぐる、様々な有益な示唆を含んでいる点でも、高い評価に値する。日本でも、両院制・国会制度、選挙制度をめぐる改革論議が進行中であるが、田中氏の業績は、議会実務、議会制研究双方にとって、示唆に富むものといえよう。

一方、本論文にも問題がないわけではない。分析が緻密かつ網羅的であるがゆえに、問題意識や縦軸・横軸という分析の視角が細部の検討の中に埋もれてしまい、論旨の一貫性や各章相互の関連性、主張の力点がみえにくくなっているという印象も受ける。また、記述が重複したり、いささか冗長と思われる箇所も散見される。しかし、検討対象のイギリスにおける憲法学・政治学が、理論よりも歴史的経験的分析を重んじているという点にも、留意しておく必要がある。上に指摘した問題は、イギリスにおける学問動向をふまえ、一般的な理論や概念では把握困難な分析対象を忠実かつ正確に描写・分析しようとした結果でもあり、長年立法調査に携わってきた田中氏の研究手法と不可分のものでもある。それが本論文の特徴をなし、学術的価値の基盤となっていることは先述の通りであり、本論文の上述のような学術的価値を何ら損なうものではない。

以上のような論文の評価と口述試験の結果に基づいて、審査員一同は、申請者・田中嘉彦氏に一橋大学博士（法学）の学位を授与することが適当であると判断する。